

漱石『三四郎』空中飛行器

Junko Higasa 2017.1.29

明治の女性の生活を支える手段は「結婚」だった。23歳になった美禰子は、かなり切羽詰まっている。生活できなければ、轢死の女と同じ運命をたどるかもしれない。その結婚を焦る会話が第五章の野々宮と美禰子の「空中飛行器」の会話に表れている。

「高く飛ぼうとするには、それだけの装置がいるから、頭の方が先に要るに違いない」「そんなに高く飛びたくない人は、我慢するかもしれません」「我慢しなければ死ぬばかりですもの」「すると地上の上に立っているのが一番安全だが、何だかつまらない」これは、まるで美禰子を取り巻く男たちみたいだ。

英語を学び、本を読み、文章を書く里見美禰子は「文学」である。穴倉で実験に没頭する理学者の野々宮宗八は「科学」である。そして「知識は力なり」と学問に集中する小川三四郎は「哲学」である。

自分の人生構築のために高く飛ぼうとする理学士の野々宮は、頭を作り、経済上の準備が整うまで結婚に動きそうにない。そこで美禰子は、そんなに高く飛ばずとも「妻を娶り、母を呼び寄せ、学問に身を委ねる」平凡な生活を考えている三四郎に結婚の望みをかけるが、彼は美禰子という詩編の索引さえ引かず、その意味を知ろうとはしない。これでは死ぬばかりである。そこでついに美禰子は法学士に嫁ぐことにした。夫は「婚姻」という民法によって女の生活(生命維持)の安全を確保する地上の「法学」である。